
はなひらかねど

清久 志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はなひらかねど

【Nコード】

N2736Z

【作者名】

清久 志信

【あらすじ】

恋愛無関心な咲子は、双子の妹・妙子の所為で大嫌いな合コンに出る破目になる。

そこで出逢った晴希は偶然にも同じ大学・同じ学部の所属だった。これまでの経験から恋愛食傷気味になっているという晴希とは、何となくウマが合い友達付き合いが始まったのだが。。
恋愛嫌悪な二人が織りなす、ちよっと変わった友情恋愛物語。

序章 はな 糸ひもせず

ああ、面倒臭い。

目の前に広がる光景に、咲子はうんざりしきっていた。さすがにそれを表に出すことはしないが、ただただ、この愛想笑いと媚のセール会場　いわゆる合コンという状況から離れたい思いでいっぱいだった。

本来、咲子は合コンなど好きではない。それどころか、むしろ嫌いだ。

けれど、その咲子がこの場所に来なくてはならなくなったのは、ひとえに双子の妹である妙子の所為だった。

数日前、どうしてもあと一人足りないのだと、高校時代の友人が妙子に電話を掛けてきた。だが妙子には、どうしても外せない用事があったらしい。いつもならば、嬉々として参加するのだろうが、残念そうな声を上げていたのを覚えている。

しかし、そのすぐ後にとんでもないことをその友人に言ったのだった。

「ごめんねえ。行きたいけど無理そうだから、代わりにサキを行かせるわ」

何を勝手なことを、と反論する前に、妙子はさっさと話を終わらせ、電話を切っていた。

「アンタ、何やってくれてんの？」

「どうせ暇でしょ？　家にいたって本読んでるかレポート書いてるくらいじゃなあい」

「合コンなんかより、そっちの方がよっぽど有意義だわ」

あまりにもこちらの都合を考えない妙子の行動に、怒りを通り越

して呆れてしまう。そもそも、怒っても無駄に体力を消耗するだけだと咲子は知っていた。妙子は昔から他人を振りまわすことが得意なのだ。しかも、本人には悪意がないから余計に性質が悪い。

咲子にとって妙子という存在は、身内でなければあまり関わり合いになりたくないタイプの人間だった。

「でもさあ、キョウちゃん本っ当に困つてたのよあ？ 友達が困つてたら、助けるのが友情つてもんじゃなあい？」

こんな台詞も端から聞いていると、ただ都合良く言い訳しているように聞こえるのだが、妙子の場合は本当にそう思つて言っている。目の前の困っている人を助けたいという、実に純粹な親切心なのだ。が、その際に犠牲になるのは妙子自身ではなく、周りにいる近しい人間であり、特に咲子はその対象になることが多かった。

妙子がもう少し思慮深く、自分自身の慈悲深い行動によって周りにもたらず影響などが考えられたならば、そうはならなかつただろう。しかし、幸か不幸か 咲子にとっては確実に不幸なのだが

妙子には目の前の問題を処理することで精一杯、という能力しか備えていなかった。

そして更に不運なのは、そういった迷惑を被る状況になつたとしても、咲子にはそれを切り抜けられるには十分な判断力や思考力、実行力などがあつたことだろう。

今までにも妙子の安請け合いで、本来やるはずではなかつた仕事を手伝わされたり、足りない人員の補充要員にされたりもしたのだが、咲子はもともと何事も器用にこなす為にさほど困難な事態に陥つたことがない。反対に安請け合ひした張本人である妙子は、不器用で鈍臭いので、手伝う分だけ邪魔になつたりもする。

結果、妙子は大した仕事もせず、簡単に誰にでもできる仕事を回され、咲子の方には難解で手間のかかる作業が回ってくるのだつた。しかし、そういった仕事をやらされる破目になるならまだいい。

事務的な仕事はけして嫌いではないし、終わった後に達成感もあり、時にはそれなりの見返りさえある。

だが、合コンなど異性に興味のない咲子には何の得もない。『ゴウコン』じゃなくて、『ゴウモン』よ、と心の中で毒づいた。

「そんな嫌そうな顔しなくなっただっていいじゃない。サキ、彼氏いないんだし、問題ないでしょ？」

「彼氏がないとか関係ないの。合コン自体が嫌いなんだから」

「それは知ってるけどお。ほらほら、キョウちゃん達と久しぶりに遊ぶって考えたらいいのよお。男の子たちはそのオプション程度で考えて、ね？」

小首を傾げて屈託なく笑う妙子。その仕草はいかにも可愛らしく、男受けもいいのだろう。同じ顔をしていても、自分には到底できない表情だと思しながら、咲子は大きな溜め息をついた。

「あ、明日の晩ご飯はサキの好物ばっかにするからあ！ 何がいい？ 生姜焼き？ 唐揚げ？ お豆腐のハンバーグ？ 最近寒いし、豚汁も作るうかあ？」

咲子の機嫌を取ろうと、妙子は途切れる間もなくまくしたてる。

そんな必死な姿を見ると、やはり咲子は妙子を憎めなかった。これも身内の情なのか、それとも慣れからくるものなのか。

「それなら、ブリ大根と蓮根のきんぴらも作ってよ」と結局許してしまうのだった。

そんな数日前の甘い自分を怒鳴りつけてやりたい。

そう思いながら、目の前に並んでいた揚げ物を一つ口に運ぶ。ギトギトの油と濃過ぎる味付けの所為で、すぐに箸を置いてしまった。口直しに含んだカクテルは水っぽく、不味さが口中に拡がっただけで、気分は下降線をたどる一方だ。

それにひきかえ、合コンは現在、比較的和やかに進行していて、お互いの学校や仕事の話で盛り上がっていた。

咲子は時々相槌を打つ程度に反応はしていたが、途中からそれも疲れて辞めてしまっていた。どうやら周りもさほど咲子を気にして

いないようだ。特に男性陣は、自己紹介や質問をし合った段階で咲子にあまり興味が持てなかったらしい。高校時代のクラスメイトたちも、咲子の性格は熟知しているし、むしろ大人しくしてくれている方が自分の気になる相手と親密になりやすいと思っっているのだろう。無理やり咲子を話に加えるような真似はしなかった。

そのまま合コンは、咲子を空気のようにした状態で終えるのだろうと思っっていた時、目の前に移動してきた男がいた。

「岡本さんって、無口なんだな」

「え？」

まさか話しかけられると思っっていなかった咲子は、咄嗟に何も返せなかった。

改めて声の主に視線を向けると、自己紹介で渡辺晴希と名乗った男だと思ひ出す。

「えっと、渡辺君、だったかしら？」

「あ、覚えてくれてたんだ」

「顔と名前を覚えることは得意だから」

勘違いされては困ると思ひ、遠回しに特別な意味はないことを伝える。大抵の場合、咲子のこういった態度で相手の男は気分を害するのだが、晴希は変わらず笑顔で話を続けてきた。

「そっかー、それ羨ましいな。俺結構苦手でさ。接客業やってるのに駄目だよな」

「そうね。致命的じゃない？」

「はつきり言うなー。ま、自分でも自覚してるから、返す言葉もないけどさ」

明らかに冷たいと思われるような咲子の態度だったが、晴希はそれでも気にする素振りもなく話しかけてくる。

これ以上に冷たい態度をとり続けてしまっっては、周りの雰囲気も悪くなると思ひ、咲子は少々晴希の話し相手になっってやることにした。

「さっき聞いたんだけど、渡辺さん、A大なんだろう？ 何学部？」

「経営学部だけだ」

「マジで？ 俺も経営なんだけど」

「渡辺君もA大なの？」

偶然にも同輩がいたらしい。しかし同じ学部とはいえ、一学部の人数は何百人という。晴希の存在を知らずにいたのも、無理はなかった。

「すつげえ偶然だなー。でも、全然岡本さんのこと知らなかったわ」

「そうね。でも、『お』と『わ』だったら学籍番号も離れてるし、そんなもんじゃない？ 基礎演や第二外語は、絶対に同じクラスにはならないじゃない」

「そりゃそうだ」

何が面白いのかわからないが、晴希は咲子の淡々とした説明にも楽しそうに頷いていた。

咲子は、こういう人見知りなく、誰にでも親しげに話しかけるタイプは苦手だ。まるで、自分の双子の妹が男になったのではないかというような、錯覚を感じてしまうからだ。

ますます早く終われと念じる想いが強くなるが、飲み放題の終了時間まであと三十分はある。

時計の針の進む速度が速まるはずもなく、咲子はただ、面白味を感じられない晴希の世間話を淡々と聞き流し、適当な相槌を打つだけの人形のようにならざるを得なかった。

「じゃあ、そろそろ二次会のカラオケに突入しようか？」

男性側の幹事の声掛けに、咲子はようやく解放されると安堵の息をついた。

最初から、二次会には参加しない約束だったのだ。それに、自分が参加しない方が盛り上がるだろうことは易々と想像できた。

幹事が清算を済ませている間に、他のメンバーは店の外へと歩き出す。最後尾に連なりながら、咲子はこの後の予定を少し考えた。

両親は飲食店を経営しているので、定休日以外は帰りが遅く、普段から咲子と妙子は交代で夕食を作っている。

今日は丁度妙子の当番であったが、彼女も出掛けているはずだ。当然家に真っ直ぐ帰ったとしても誰もいないし、食事の準備などもされていない。

居酒屋の料理があまりにも不味すぎて、ほとんど口にしていない咲子は空腹感をどうにか鎮めたかった。そういえばと、この辺りに自分好みの定食屋があったことを思い出し、そこに寄ってから帰ることに決定する。

幹事の二人が店から出てくるのを見計らって、先に帰ることを告げた。

女性陣はもともと咲子が二次会不参加ということを知っていたので、気をつけてねと声を掛ける。

逆に男性陣は、表面上は残念そうな声を上げて、咲子の暇を惜しむ様子を見せていた。

それに咲子も「ごめんなさい。また誘って下さいね」と我ながら嘘くさい愛想を返し、手を振ってその場を後にする。

しばらく歩いて人混みに紛れた頃、咲子は特大の溜め息をついた。「あー、疲れた！ まったく、この疲労分は夕エに返してもらわないとね」

家に帰ったら妙子に嫌味を言っつてやると心に決め、目的とする定食屋へと足取りも軽やかに向かおうとする。

しかし、数歩歩いたところで、誰かに呼ばれたような気がして、反射的に足を止めた。

何となく嫌な予感を感じながら、ゆっくりと振り返る。

妙子から数メートル後方、笑顔を湛えて駆け寄ってくる渡辺晴希の姿が見えた。

第一章 はな しらぬひと

すっげえ、つまんなそう。

初対面の相手に対して失礼な感想だとは思ったけれど、それが晴希の率直に感じた印象だった。

岡本咲子と自己紹介をした彼女は、明らかに他の女性メンバーと異なる雰囲気を持っていた。一言でいえば、クール。細かく説明をすれば、無口で媚びなくてマイペースで、それでも最低限周りの雰囲気壊さない程度に気を遣っている。

多分、この合コンに関しては、彼女の本意で参加しているのではないのだろう。晴希はそう読んでいた。

だからこそ、興味が湧いたのだ。どんな人なのだろうと。

しかし、それは彼女を『女』として 言い換えれば、恋愛対象として ではなく、『一個人』として気になったという意味だ。

何より晴希が一番気になったのは、コンパが始まって最初の方にあった質問に対しての答えだった。

それぞれ一人ずつから質問を出し、それを順に答えていくという形式で、一人の女の子が発した質問が『初恋はいつ、どんな相手?』というものだった。ありきたりと言えればありきたりな質問だ。

それに対して咲子の答えは、一瞬誰もが驚くようなものだった。

「初恋はしてないわ」

短く素っ気ない答えに、質問を出した女の子は「まさかあ」とか「何かちよつとくらいはあるでしょ」などと新たな答えを引き出すうとしていたが、咲子は曖昧に微笑むと「本当にないわよ。多分、この先もね」と付け加えただけだった。

白けてしまいそうな空気になったが、そのまま咲子が「じゃあ、私が質問する番ね」と上手く話を切り替えたので、その後も場の雰囲気は保たれた。それでも、その咲子の一言はメンバー全員に、更

に言つと、男性陣全員にかなり強いインパクトを与えた。良い意味でも、悪い意味でも。

その後も、予想通りともいうべきか、咲子の存在は少し異質だった。

積極的に話に加わらない。しかし、適度に相槌は打ったりして、話は聞いている様子。

まるで空気のように存在して、彼女は彼女だけのペースで動き続けている。それでも妙に浮いてしまわないのは、絶妙なバランス感覚を備えているからなのだろうと思えた。

しばらく離れて様子を窺っていた晴希だったが、他のメンバーの恋愛話や自慢話にも飽き、それ以上に咲子と話がしてみたいと思つて、彼女の前へと移動した。

話しかけられた咲子は驚き、多少冷たいとも思えるような言葉もあつたが、あからさまに嫌がる態度はとらず、晴希の会話に付き合つてくれた。

多分、こうして話しかけられるのも嫌いなんだろうとは思つてはいたものの、それでも晴希は咲子と色んな話をしてみたかったのだ。とはいえ、最初からあまり細かいことを訊いたりしても失礼だと思ひ、とりあえずは世間話程度の話題で間を繋ぐ。

まだ二次会もあることだし。そう思っていたのだが、居酒屋を出た彼女が「用があるから先に帰る」と言い出したことは予想外だった。

少し考えれば、無理やり付き合わされた咲子が一次会だけで帰つてしまうことも十分に考えられたのに、悠長に構えていた自分自身の浅はかさが恨めしい。

二次会の会場に向かおうとしている幹事を慌てて呼び止め、晴希は手短かに帰ることを伝えた。幹事を務める友人は顔を顰めて答える。「晴希、岡本さんは美人かもしれないけど、辞めといた方がいいと思うぞ？ なーんかお高くとまってるって感じじゃん。絶対男を見下してるタイプだって」

「そんなんじゃないって。女の子一人で帰したら危ないだろ？ それにもともと、俺は人数合わせなんだしさ。岡本さん帰ったなら、俺がいなくなっただ方が数合うだろ」

「いや、まあ、そうだけどさ」

「んじゃ、またな。楽しんでこいよ」

軽く肩を叩くと、晴希はくると身を翻し、咲子の消えた方角へと駆け出した。まだ居酒屋の前で別れてからそれほど時間は経っていない。

さほど走らなくても、すぐに咲子の後ろ姿を見つけることができた。

「岡本さん！」

あと数メートルというところで、声を掛ける。咲子の足が止まり、ゆっくりと振り返った。思わず笑みが零れると、咲子は少し訝しうに「どうしたの？」と訊ねてきた。

「いや、女の子一人帰らせたら危ないと思ってさ」

「別に大丈夫よ。そんなに遠くもないし、まだ遅い時間でもないし。素っ気なくはあるが、冷たくは感じない程度の口調で、咲子は晴希の申し出を断ろうとしているようだった。しかし、実際は自分を鬱陶しく思っているのだろうということくらい、晴希は承知していた。

「てかさ、実はそれはただコンパを抜け出す口実で、ホントは岡本さんと話したかっただけ」

晴希が正直に告げた途端、咲子の表情が目に見えて強張った。そのまま無言で踵を返し、歩き始める。

「あ、ちよっと！ 誤解しないでほしいんだけど！ 俺、別に岡本さんを口説こうとかそういうんじゃないから！」

慌てて晴希は後を追いつ、咲子の隣に並ぶ。

「じゃあ、何？ 私は彼氏とか恋愛に興味ないわよ」

「うん。むしろ、岡本さんのそういう部分に興味があんの」

刺々しくなる咲子の態度に負けず、晴希は居酒屋では話せなかつ

たことを語り始める。

「俺も今、彼女とかいらなんて思ってるし、今日の合コンも数合わせだったわけ。で、今までにも『彼氏いらない』とか言ってる女の子には何人かあったことあるけど、岡本さんはその子たちとも何か違うなーって思って、ちょっと話をしたくなっただんだ」

そこまで話した瞬間、咲子の足がピタリと止まる。

自分の熱意が通じたのかと思っていると、咲子は晴希を見上げて少し迷惑そうに言った。

「どうでもいいけど、どこまでついてくるつもり？」

「とりあえず、家までかな。送っていく間だけでも話し相手になってくれたらいいんだけど」

さすがに面と向かって目障りだと言われるかもしれない。そう思っただけで覚悟を決めた晴希に、咲子は呆れたような溜め息をついた。

「私、すぐその定食屋に寄るつもりなんだけど、渡辺君どうする？」

「え？」

「だから、さっき居酒屋で結構食べたんですよ。定食屋はきついんじゃないかって訊いてるの」

その言葉が、遠回しに話に付き合ってくれろという意味だと気が付き、晴希は思わず声高に叫んでしまった。

「あ、問題ないない！俺の胃袋のキャパは、居酒屋程度では埋まらないから！」

「そ、そう……」

晴希のあまりの勢いに押され気味な咲子だったが、すぐに気を取り直すと、「こっちょよ」と晴希を促した。

案内された先は、家庭的な雰囲気漂う店。なかなかの人気店らしく、店内はサラリーマンから家族連れ、大学生まで様々な客層で賑わっている。

案内されたテーブルに向かい合って腰を下ろすと、咲子はすぐさまメニューを広げて晴希にも見せてくれた。

「ここ、何頼んでもハズレないわよ。さっきの居酒屋と違ってね」
微かにのせられた嫌味が、合コンに対する咲子の不満の一部を覗かせた。

咲子の言うとおり、あの居酒屋で出された料理は、お世辞にも美味しいとは言えなかった。

「確かにあれは微妙だったな。ま、安いから仕方ないと言えば仕方ないんだけど」

「安くても美味しいお店はあるわよ。あそこは完全に店の雰囲気ですら誤魔化してるだけ。お酒も全然美味しくないし」

「岡本さん、厳しいねー」

色気より食い気、などと言っては失礼になるだろうが、咲子の発言はまさにその言葉が相応しい気がした。見た目のクールの印象とは、また違った側面に、晴希はつい顔を綻ばせてしまう。

「親が飲食店やってるからね。渡辺君、決まった？」

「うん。俺のどストライクなのがあったし」

晴希の返事に頷くと、咲子は恥ずかしがるそぶりもなく、少し声を張って店員を呼んだ。

「すぐさま「お伺いいたします」と笑顔を湛えた女性店員が注文を受けにくる。

「『和風デミハンバーグ定食』を一つと……」

「あ」

咲子の注文に思わず声を洩らしてしまった。まさに晴希が頼もうと思っていた品だったからだ。が、今更決め直す間もなく、咲子に悪い気がしながらも、「同じのをご飯大盛りで」と付け加えた。

店員が注文を確認し戻っていった後、咲子が少し不思議そうに訊ね掛けてくる。

「何でそんなに申し訳なさそうに注文するわけ？」

「え？ ああ、何となく、被ると嫌なんじゃないかなと思って」

「……まあ、確かに親しい人とだったら被らないようにするけど」

「うわー、はつきりと親しくない人宣言された」

「親しくはないでしょ。今日会ったばかりなんだし」

咲子の言葉は冷たく切り捨てるようにも取れるが、見事なまでに正論でいっそ清々しかった。

本当に、晴希の今までの人生の中で、周りにはいなかったタイプだ。咲子に対する晴希の興味が、また一つ高まる。

「岡本さんさ、何で恋愛に興味ないの？」

「渡辺君だって、彼女要らないでしょ？ 似たような理由じゃない？」

触れられたくはないのか、それとも単純に話すのが面倒なだけか、咲子はちゃんとした回答を寄越してはくれなかった。

しかし、それではわざわざ追いかけてきた意味がないと思い、晴希は食い下がる。

「いや、俺とは違うでしょ。俺の場合は、一応色んな子と付き合ってきた結果、恋愛食傷気味になっただけで、もともと恋愛に興味がないわけじゃないし。岡本さんの場合は、完全に人生の上で恋愛不要と思ってるんじゃないの？」

「不要、ってわけじゃないけど、ね……」

億劫そうではあるが、咲子は話し始めた。

「恋愛って、他人のを見てるだけでも疲れるの。私、双子の妹がいるんだけど、その妹が私と正反対の超恋愛体質でね。あの子の一挙一動見てたら、それだけでもうお腹いっぱいって感じ」

心底疲れると言いたげに、咲子は肩を竦める。そしてその疲れを癒そうとするかのように、水を一口含み、喉を潤した。

「でも、別にそんなに珍しくもないでしょ。私みたいに、『彼氏は要らない』『恋愛に興味はない』って言ってる子、結構いるわよ」
「確かにいることはいる。でも、その場合は、俺と同じように『痛い目を見た』だとか、『うんざりしてる』ってタイプか、そういうことを言っただけ逆男の気を引こうとする口だけタイプか、どっちかなんだよな」

全ての女性がとは言わないまでも、今までに自分が関わった異性

を思い返すと、ほとんどがこのパターンに当てはまっていた。

しかも後者は意外に多く、常日頃から「男なんて興味ない」などと言っていた女子が、いわゆる『イケメン』から告白された途端にあっさりと付き合った、などという光景を晴希は何度も見ていた。

「それにさ、初恋してないってのが珍しい。『男要らない』タイプの女の子でも、大抵は初恋くらいしてるから」

「渡辺君の言い方だと、私は超異端児みたいね」

多少失礼にも思える晴希の発言だったが、咲子はそれに不快さを滲ませることもなく、むしろ面白がるように声をたてて笑った。

少しは警戒を解いてくれたようだと思うと、晴希の口からは自然と安堵の息が笑みとともに零れ落ちた。

「確かに異端児かも。勝手なこと言うけど、岡本さんだったら、まともな異性の友達になれそうな気がするんだ」

「異性の友達、ね」

小さな呟きを洩らすと、咲子はわずかに苦々しそうな表情を見せる。

何か嫌なことを思い出させてしまったのかもしれない。せつかく友好的な雰囲気になり始めた途端の躓きに、晴希は心の中で自分に對して舌打ちをした。

「本当に、男女間での友情って成立するのかしら」

「岡本さんは、有り得ないと思ってるタイプ？」

「昔は信じてた。でも、途中から信じられなくなった、ってところかな」

だから、男友達もいないのよ、と咲子は苦笑を重ねる。

咲子の発言から考えると、過去に友人と想っていた異性と何かあったのだろうか。

「まあ、難しいと言えば難しいのかもしれないけどさ」

「ちよつと、今言ってたことと違うじゃない」

「一般論としてってことだよ」

咲子から軽い批難を受け、晴希はすかさず弁解に入った。

「中学とか高校の頃って丁度お互い成長期だからさ、それまで異性として意識してなくても急に気になったりもするもんだしさ」

小学校からの同級生が、気付いたら体型も変わり、おしゃれなどにも気に掛け始め、一気に大人びてくる。

かつては平気で手を繋いだりできた相手に、軽く触れることすら躊躇われてしまう。

それは思春期特有の感覚だろう。

そして、異性を意識し始めると同時に、自分の恋愛対象としての枠に入るのか入らないのかを、どこかで測っているように思える。

咲子はさばさばとしているけれど、女らしさもちゃんと持ち合わせているし、気遣いもできる性格だ。客観的に見れば、外見的にも内面的にも、そういった思春期の男子の多くから恋愛対象として見られてしまうのも仕方がないだろう。

「岡本さんの場合、充分美人の部類に入ると思うんだよね。あ、これは俺の好み云々は抜きね。だから、友達として見ようと思っても、無理な部分はあると思うんだよ」

「でも、渡辺君はさっき、友達になれそうっていったじゃない」

「だって、今の俺は可愛らしい思春期の男の子じゃないし」

そう言ってニツと口角を上げると、咲子は一瞬面食らったような表情になり、数瞬後小さく吹き出して押し殺した笑いを零した。

そこに注文した定食のお盆を二つ持った店員がやってくる。

笑いを堪えながら咲子ありがとうと料理を受け取ると、一口水を飲んだ。それでようやく落ち着いたので、とりあえず食べようと晴希を促した。

「美味そー！ めっちゃ腹減ってきた！」

ふんわりとした淡い湯気を立てたハンバーグには、濃厚な褐色のソースがかけられ、肉の焼ける匂いとソースの焦げる匂いが混じり合って食欲をそそる。

副食には野菜の炊き合わせとサラダが添えられていて、味噌汁も具沢山。

六百円という値段から考えると、満足過ぎるポリユームだ。お金にあまり余裕のない晴希には、有り難過ぎる料金設定だった。

頂きますと手を合わせると、さっそく箸をとり、メインのハンバーグを一口頬張る。

見た目よりもあっさりとした風味のソースに、ジューシーな肉の旨みが絡み合っつて口中に拡がった。

「ウマっ！ 岡本さん、この店ナイスチョイス！」

「お気に召してもらえて良かったわ」

晴希が勢いよく食事をかきこむ姿に、咲子は多少呆れたような表情ではあったが、それでも嬉しそうな感情も見取れた。

そして咲子自身も料理を口に運ぶ度に、本当に美味しそうに表情が綻んでいる。

居酒屋にいた時とはまったく違う咲子の雰囲気、晴希は興味深く観察していた。

「……それで、今は『可愛らしい思春期の男の子』じゃない渡辺君は、何で私と友達になろうと思ったの？」

晴希の観察するような目に気付かないのか、それとも気にしていないのか、咲子は食事を堪能しながらも先程の会話に戻してきた。

口に入れたばかりの炊き合わせのかぼちゃを急いで咀嚼し、お茶で流し込んでから晴希は口を開く。

「『女』ってさ、正直面倒なんだよな」

「女を目の前にしていう台詞？」

「岡本さんは女だけど異端児だから例外。じゃなくて、俺が今まで関わってきた女のこと」

話しながら思い返してみると、思わず表情を顰めてしまう。

が、そんな顔をしていては、美味しい料理とそれを紹介してくれる咲子に失礼だと思い、すぐに改め、笑顔を作った。

「俺さ、スポーツサークル入ってんの」

「スポーツって何の？」

「色々。フットサルしたり、3on3したり、テニスしたり。特定

のスポーツばかりするんじゃない、やりたいことは何でもするから『スポーツ』サークルなわけ」

「なるほどね」

今まで話した咲子の印象から考えると、サークル活動などにはあまり興味がなさそうだった。そう思い、更に詳しく説明を続ける。

「まあ、運動は好きだけど、大きな大会目指して鍛錬するってのは大学に入ってまでしたくない、ってヤツが多いとこなんだ。俺もそうだしね。でもって同時に、運動できると女の子にちやほやしてもらえらるって考えてるヤツも多いわけ」

「要するに、スポーツがメインのイベントサークルって感じ？」

「そう、まさにその通り！」

皆まで説明しなくても、咲子がピタリと言いたいことを汲み取ってくれたので、晴希は思わず声を高くしてしまった。

一瞬近くの席のサラリーマンがびっくりしたような視線を向けたので、恥ずかしくなまってすぐさま声音を落とし、誤魔化すように箸を動かす。

「そ、それでさ、うちのサークルに入ってくる女の子も八割方男目当てなんだよ」

「まあ、イベントサークル紛いなら、それは仕方ないでしょうね。でも、それは男の子も嬉しいんじゃないの？」

「女目当てのヤツはね。俺はスポーツを楽しみたい派だし、やっぱり女の子いると気を遣うからさ。あんまり激しいスポーツには参加させられないし、かといって、いつも応援ばかりさせてるのもないって。俺以外にもそう思ってる奴は何人かいるよ」

晴希の所属するサークル内では、はっきりとスポーツ派と出逢い派に分かれている。スポーツ派としては、あまり男女間の親交を深める為のイベントなどはしたくはないのだが、圧倒的多数を誇る出逢い派は、そういったイベントに意欲的だ。不満を感じて、スポーツ派ばかりで新たなサークルを作る話も出たのだが、人数が集まらずに断念した過去があった。

それでも、他の同系統のサークルよりは、スポーツもちやんとやっているということで、スポーツ派のメンバーたちは妥協をしたのだ。

「でもさ、女側からしたら、女目当てのヤツもスポーツしたいヤツも、みんな一緒に見えるわけ」

「そうなの？」

「そうなの。あからさまに、『彼女欲しいからココに入ったんでしょ？』とかいう女もいたし」

「つまり、それを言った女は『彼氏欲しいからココに入りました』ってことよね。何で他人も自分と同じ考えと思うのかしらね」

咲子の溜め息まじりの返事に、その通り！ と再び声を上げそうになったところを、際どいところで飲み込んだ。

自分を落ち着かせようと、またお茶を一口すする。

「ホントにそう。で、押し付けがましく『付き合っただけでもいいわよ』的な雰囲気漂わせてたりするんだよねー」

「別にそんな子なら付き合わなくてもいいじゃない」

咲子に言われるまでもなく、実際晴希はそこまで我の強い相手とは付き合いはしなかった。けれど、付き合った後で、そういう本性を見せ始めた場合もあったのだ。

それを言つと、あっさり咲子は「それは渡辺君の見る目がなかったのね」と言い放つ。

「いや、まあ、そう言われたらおしまいなんだけどさー」

「もしかして渡辺君、そういうタイプの女の子とばかり付き合ってたわけ？ だったら真面目そうな子と付き合えば、恋愛も嫌じゃなくなるんじゃないの？」

「俺もそう思ってたさ、すごく素朴で控え目で、健気に尽くしてくれる子と付き合ってたわけよ」

咲子と同じことを思い、付き合った彼女のことを思い出す。

晴希にとつて、それは一番最近まで付き合っていた彼女だった。

特別顔立ちが整っているわけではないが愛嬌があり、いつもにこ

にこと笑顔を浮かべ、甲斐甲斐しく晴希の為に尽くしてくれた。
良い子だったのだと今でも思う。

けれど、だからこそと言ってもいいのかもしれない。

晴希の恋愛嫌悪に決定打を与えたのは、その良い彼女だった。

「良い子過ぎた」

「は？ 何それ？」

良い子なら問題ないじゃないと、咲子は納得できない様子だ。

「だからさ、すっごく尽くしてくるんだけど、それが重くなって……」

「ああ、そういうこと」

「ホント甲斐甲斐しく尽くしてくれてさ。風邪ひいた時なんか、特に助かったんだけど……。そのうち、それがしんどくなってきたんだよな」

贅沢を言っていると自分でも思うのだが、それでも彼女の献身を重荷に感じてしまった瞬間、関係が続けられないと悟ってしまった。それはただの我がままだと批難されるかと思っただが、意外にも咲子は少しばかり表情を曇らせながらも、困ったように微笑んでいた。「どうかした？」

「何かね、妹の話を聞いてるみたいだなと思って」

「妹さんって、さっき言ってた恋愛体質の？」

「そう。あの子も、本気で好きになったら、尽くして尽くして尽くしまくるタイプなの」

つまり、晴希の話の彼女が自分の妹と被ってしまい、複雑な心境に陥ったのだという。

妹の献身的な姿を知っている咲子にとって、晴希の発言は腹立たしく思っても仕方ないだろう。それなのに晴希を咎めようとはしない咲子が疑問だった。

「辞めればいいのって思うくらいに一途だね。ほんっと、馬鹿正直。それで騙されたことだってあるのに、あの子全然懲りないんだもの」

「……ごめん。不愉快な話だったよな？」

「そんなことないわよ。尽くされ過ぎると嫌になるって言うか、重すぎると思うのも当然じゃない？ 結婚するとかならまだしも、学生同士の恋愛なんて、そこまで発展する可能性だって低いんだから冷めている、というよりも、極めて冷静というべき口調の咲子に、少し前の会話を思い出した。」

『恋愛って、他人のを見てるだけでも疲れるの』

『あの子の一挙一動見てたら、それだけでもうお腹いっぱいって感じ』

恋愛は疲れるものと考えている咲子には、それに一生懸命になり過ぎていく人間 特に双子の妹などは、理解しがたいのだろう。

同時に、そういう強い想いを向けられた場合、咲子自身も一歩引いてしまう性質のようだった。

「岡本さんって、やっぱりいいわ」

「何よ、突然」

前触れもなく呟いた晴希の一言に、咲子の表情が俄かに険しくなる。

我に返り、自分の発言が誤解を招きかねないものと気付いて、慌てて訂正した。

「変な意味じゃないって！ 今までさ、こつという話を女にしたら、みんな揃って彼女の味方だったからさ。てか、男でも俺の味方してくれるヤツ少なかったし」

「別に渡辺君の味方をしてるわけでもないんだけどね。単に、渡辺君とその彼女の価値観や恋愛観が合わなかっただけでしょ」

晴希の弁解を聞いた咲子は、元通りの冷静で淡々とした調子に戻り、止まりがちだった食事を再開する。

それにホッと胸を撫で下ろし、晴希も話しっぱなしで進んでいなかった食事に箸をつけた。

「そうなんだけど、周りから言わせると俺はひどいヤツになるみたいだな。ま、俺もやっちゃいけないことをやってたって自覚はあるけ

ど」

「何したわけ？」

「作ってくれたご飯に、『もっとこうした方がいいよ』ってアドバイスしちゃった」

晴希の口から乾いた笑いが零れる。

咲子は「あー、それは可哀想ねー」と半分くらいしか気持ちの籠もっていない言葉を返した。

「いや、でもさ。俺、料理得意だからさ、正直なところ俺が作った方が美味かったわけ」

「でもそれは女の子の立場ないわね」

「だから、初めて作ってくれた時に思わず出ただけで、それ以降は言わなかったって」

晴希は自分の非を認め、その後何度か出そうになった助言を、ことごとく飲み込んできた。彼女は何かを作る度に晴希の様子を気にしていたので、ずっと気に病んでいたのだろうと思うと、余計に不憫でならなかった。

「もしかして、それが別れた原因の一つになってたりもするの？」

「う……。まあ、ないこともない」

『美味しい』以外の感想を述べようとしたら、ついつい余計なことまで言ってしまうようになる。その所為で、晴希は彼女の作った料理を食べていても、言葉少なになることが多かった。

けっして彼女の料理が不味いわけではないのだが、だからこそ、あと一歩足りない部分を教えたくなる。けれど、それを言うと、彼女のプライドが傷ついてしまう。周りの友達からは、『料理上手』の褒め声高い彼女だったので、なおさらその思いは強かった。

「そっか、それで私は夕工を許せるのね」

「夕工？」

「あ、さっきから話に出てる妹よ。妙子って言うの。夕工はね、不器用だし頭も悪いし考えも浅いし、良いところなんてほとんどないんだけど、昔から料理だけは上手いのよ。まあ、今は学校通ってる

から、当然と言えば当然なだけだね」

それまで妹を語る際には微妙な表情を浮かべてばかりの咲子だったが、今は珍しく嬉しそうに、そしてどこか誇らしげに微笑んでいた。

咲子にとって、妹の唯一自慢できる部分なのだろう。

「ほら、よく『旦那の胃袋』を掴めって言っじゃない。あれと似たようなもんよ。タエはホントろくなことしないんだけど、いくら腹が立ってても、美味しいご飯作るからって謝られたら、つつい許しちゃうのよね」

「胃袋掴まれてるの」と冗談めかして笑う咲子につられて、晴希も自然と頬が緩んでいた。

「じゃあ、俺も頑張って岡本さんの胃袋掴もうかなー。料理上手っての、友達としてポイント高くない？」

「本当に上手だったとしたら高評価ね。でも私、味には結構うるさいわよ」

「それは既にわかってるよ。でも、俺も結構研究してる方だからね」晴希自身、単なる料理好きではないと自負している。

美味しいと言われるお店にはお金の許す範囲で食べに行くし、料理の基礎なども独学だが学んでいた。

常日頃から自分でレシピを考えては、親しい男友達に試食してもらったりもしていたし、きっと咲子に美味しいと言わせられるだけのものができるだろうという自信があった。

「じゃあ、ご相伴に与れる機会を楽しみにしてるわ」

そう言って笑うと、咲子は残っていた料理を綺麗に片付け、箸を置いてごちそうさまと手を合わせた。

その様子からは、上辺だけの社交辞令でないように思える。

「それってさ、これからも友達として付き合ってくれって取っついていいんだよね？」

「いいわよ。今のところ害はなさそうだし、同じ学部の友達いると、色々助かることもあるしね」

そこまで言うてから、咲子は「但し」と付け加える。

瞬間的に真面目な表情になったので、晴希も思わず表情を引き締め、咲子の言葉を待った。

「渡辺君の料理が下手だったら、即縁は切れるかもね」

「え、そこ!？」

晴希のツツコミに対し、咲子はにんまりと悪戯な笑みを浮かべたのだった。

第二章 はな わづらはし

合コンの日以来、咲子は晴希と顔を合わせる機会が増えていた。今まで互いを知らなかった為に気付きようもなかったのだが、幾つか同じ講義もとっていたからだ。その流れで、そのまま昼食を共にすることも多かった。

それに加え、晴希と電話番号やメールアドレスも交換していた。咲子から連絡をとることはあまりなかったが、しつこくない程度に晴希から食事の誘いがあったのだ。

いつもならば、異性からの誘いなど煩わしく思うのだが、晴希の場合はそんな感情が湧かなかった。

晴希は、本当に『友達』として接している。そんな風に自然に信じてしまうのも、晴希と普段交わす会話のほとんどが、食べ物に絡んでいたからだ。

その会話の数々を思い出し、咲子は小さく笑いを零す。

晴希に誘われて出掛ける時は、大抵「
にあるお店が美味しいから付き合って」という誘い文句だった。

どうやら、晴希は美味しいと評判の店を、暇があれば回っているらしい。

注文した料理をじっくりと観察し、時にはスタッフに調理法などを聞いていたので、

グルメを気取っているわけでも、ただ食べ歩くだけが目的というわけでもなさそうだった。

不思議に思っ、ある日昼食と一緒に取っている時に訊いてみると、意外な、けれど納得できる答えが返ってきた。

「俺、将来お店出したいんだ」

少し照れながらも、晴希は自信をのぞかせてそう言い切った。

料理を食べて幸せそうな笑顔になる瞬間が好きなのだ、晴希自身が眩しいばかりの笑顔を見せた。

その笑みに、出先でも咲子が食事をとる様子を嬉しそうに眺めていたなと思いつく。

「でも、それだったら何で普通の大学入ったの？ 調理師学校とかもあるじゃない。それとも、大学入ってからお店出したいって思っただしたわけ？」

「いや、高校の時から思ってたよ。でもさ、お店持つのって料理できるだけじゃ駄目だろ？ だから経営の勉強もしようと思ってる」
それから晴希は生き生きと瞳を輝かせながら、将来の夢について語り出した。

高校時代から、学校に禁止されているにもかかわらず、知り合いのお店で働かせてもらっていたこと。

その店の味と雰囲気が好きで、自分の目標としていること。

夢の為に、色んな店の味を知り、勉強し、自ら試行錯誤を繰り返しているということ。

晴希が料理に対して自信を持っていたのは、それらの積み重ねがあったからなのだとうやく咲子は合点がいった。

だが、一つだけ晴希の話に納得できない部分があった。

それは、晴希が持ちたいという店の種類だ。

「でも、どうして居酒屋？ それだけ頑張ってるなら、小料理屋とか洋食屋でもいいじゃない」

咲子の疑問に、晴希は笑みを更に深めた。

「咲子さんさ、居酒屋の率直な印象って何？」

「そうね……。学生やサラリーマンが多い、比較的安い、但し料理やお酒はイマイチなこと多い。こんなところかしら」

指折り数えながら咲子が一つ一つ挙げていくと、晴希はそれくらいうんと頷いている。

同意を示すのなら何故、とますます疑問の色が濃くなった。

「じゃあさ、美味しくて、でもリーズナブルな居酒屋とかあったら嬉しいよね？」

「そりゃ嬉しいわよ。友達と呑みに行くことだってあるんだし、値

段が変わらないなら、絶対に美味しい方がいいじゃない」

「うん、俺はそういう店を作りたいわけ」

変わらぬ笑顔で答える晴希だったが、それでも咲子はまだ納得しきれなかった。

それならば別に、他の飲食店でも問題がない気がしたのだ。

そんな咲子に気付いたのか、晴希は更に言葉を繋げた。

「大学時代の出逢いって貴重だしさ、社会人になった時の付き合いだとかってのも大事だろ？ で、そういう時に一番頻繁に使われるのって居酒屋だと思うんだよな。その居酒屋がさ、美味しい料理と落ち着く雰囲気を提供できたら、たとえばコンパや飲み会が盛り上がるのに一役買えると思うし、まだ打ち解けてない会社の上司とも話が弾むんじゃないかなーって。やっぱり、美味しいもの食べてる時って、人間幸せだろ？」

そこで、ようやく咲子はそこまで考えがあつたのだと腑に落ちた。

同時に、晴希が思っていた以上にしっかりと将来を考えていることに感心してしまった。

「渡辺って、意外に計画性あるのね」

「意外につて……、俺そんなに行き当たりばつたりに見える？」

「あ、ごめん。見える」

「咲子さーん！」

口ではそう言っただけからかいながらも、心の中では尊敬する気持ちが生まれていたのは確かだった。

そして、同時に羨ましくもある。

咲子はこれといって将来を決めているわけではなかった。

経営学部を選んだのも、両親の言む飲食店の助けになればいい程度の考えで、あとは就職時に大卒であつたほうが幾らかマシなはずだと考えたからだ。

晴希のような明確なビジョンがあるわけでない自分が、少し恥ずかしくなった。

けれど、それを表に出しても仕方がなく、これから自分自身で見

つけていけばいいと前向きに考える。切り替えが早いのも、咲子の長所の一つだ。

妬みにも似た微かな感情はさっさと頭の隅に追いやって、素直に晴希を応援することを決めたのだった。

そんな風に咲子と晴希の友好的な関係が続いている中、妹の妙子が咲子の行動の変化に気付いたようだった。

以前に比べて出かける回数が増えたので、それも仕方がないだろう。

その日は晴希ではなく、高校時代の友達との約束で出掛けようとしていたのだが、玄関先まで妙子は見送りに出てきたかと思うと、ニヤニヤしながら咲子の服の裾を引っ張った。

「何よ、気持ち悪いわね」

「サキサあ、もしかしてデートお？」

「はあ？ 今日にはマリーに会うって言ったじゃない」

「でもお、最近よく出掛けるでしょお？もしかして、この間の合コンで彼氏できちゃったのかなあって……」

合コンでの出逢いで付き合いが増えたことは確かだが、晴希は友達でしかない。

下手に嘘をつけば、うるさく追及されるだろうと思い、咲子は「友達ができただけよ」

と素っ気なく返した。ところが、『友達』というフレーズに、妙子が思った以上の反応をした。

「友達い？ そんなこと言っても、絶対サキに気があるってえ！」

「アンタの価値観で測らないでくれる？ 渡辺はそういうんじゃないわよ」

「へえ、渡辺君っていうんだあ。ね、ね、かつこいいの？」

明らかに話を聞いていない妙子に、咲子の苛立ちは増すばかり。

けれど、そんな空気も読んでくれないのが、妙子が妙子たる所以

だ。背は？ 車は？ などと、咲子にとってはどうでもいいような質問を幾つも重ねていく。

不機嫌が頂点に達した咲子は、いまだに服を掴んでいた妙子の手を乱暴に振り払い、玄関のドアを開けた。

「タエ、うざい。これ以上そういうこと言つなら、二度とタエの頼みごと聞かないから」

早口でそう言い残すと、振り切るように外へ出た。背後からは、縋るような妙子の謝罪の声が聞こえる。それを無視して足早に駅へと向かい、目的地へと繋がる電車に乗り込んだ。

待ち合わせの場所は、最寄り駅から二駅目にあるターミナル側の喫茶店。咲子が辿り着いた時にはすでに友人の姿があった。

「早いね、マリ。私も早めに来たつもりだったのに」

「いつもサキを待たせちゃうからねー。今日は勝った」

小さくガッツポーズを作るマリこと真田万里江に、咲子は先程までの苛々を忘れて笑みを零した。

万里江の座る席の正面に腰を下ろし、空いている椅子にバッグを置く。

店員が注文を取りに来たのでホットコーヒーを頼んだ後、つい大きな溜め息をついてしまった。

「何？ 既に疲れてない？」

「うん、まあ。出がけにタエがね」

思い出すと自然と眉間に皺が寄る。

咲子のうんざりとした表情に、万里江はくすくすと笑い出した。

「タエちゃん、相変わらずなんだ？」

「相変わらず過ぎよ。少しは成長つてモンをしてくれないかしら」

「とか言いつつ、サキはタエちゃんに甘いもんね」

「そんなことないって。結構厳しく言ってるわよ？」

万里江が言うほど、妙子を甘やかした記憶はなかった。

むしろ、何かやらかす度に、きつい言葉で叱責したことの方が多

いと思う。

しかし万里江は、不満そうな咲子に頭を振った。

「口で言っても、結局タエちゃんを突き放せないでしょ？ 最終的には、絶対助けてるんだもん。そりゃあ、タエちゃんもサキ離れできないと思うよ」

二人のことをよく知る万里江に言われてしまつては、返す言葉もなかった。

確かに、咲子はいつも妙子を見放すことができない。それは身内の情もあるだろうし、妙子自身に切り抜けるだけの力がないからだと理解しているからだ。

けれど、第三者から見た場合、それは妙子を甘やかしているとか見えないらしい。

「そっか、私、甘いのか」

「ま、サキに彼氏でもできれば変わるんじゃない？」

「何で？」

「彼氏ができたら、必然的にタエちゃんと一緒に時間減るでしょ？ 時には、タエちゃんより彼氏優先することだってあるはずだしさ、タエちゃんが甘える機会が無くなるんじゃないかな」

万里江の言い分はわからなくもなかったが、それはかなり現実的ではないと思わずにはいらなかった。

咲子は彼氏など必要としていない。作るつもりもない。それは、長い付き合いの万里江だって、充分に承知しているはずだった。

「まーた難しい顔してー。どうせ『彼氏なんて作らないから、そんなのは空論だ』とか思ってるんでしょ」

「わかつてるんじゃない」

「タエちゃんもだけど、サキも相変わらずだねー」

久しぶりに会っても変わらぬ咲子の頑なさに、呆れるというよりは感心したといった様子で万里江は吐息を洩らした。

そんな万里江の態度を不服としたのか、話の途中で運ばれてきていたコーヒーにミルクだけを加え、少し怒ったようにしつこいくら

いかき混ぜる。

「そういうマリはどうなのよ」

「私？ 私も相変わらずよ。子供と旦那の世話で、手一杯」

面倒臭そうな口振りとは正反対に、万里江の表情は幸せに満ちていた。

万里江は高校を卒業してすぐに、以前から付き合っていた二つ上の先輩と結婚をした。

いわゆる『できちゃった婚』ではあったのだが、もともと二人とも結婚も視野に入れていたらしく、二年ほど経った今でも円満に過ごしているようだ。

恋愛に興味のない咲子ではあったが、万里江のような人生も悪いものではないと理解している。

自分には到底できないとは思うが、家事や子育てに追われつつも充実感を伴った表情の万里江は、とても輝いて見えた。

「でもね、子供は良いよー。サキも早いうちに結婚して、さっさと産みなよ」

「あのね……。恋愛しないって言うてる人間に、『早く結婚して子供産め』はないでしょ」

「何言ってるの。恋愛と結婚は違うんだから」

その言葉は、一般的によく耳にするものではある。

けれど、まさか完全な恋愛結婚の万里江の口から出てくるとは、思いもしなかった。

「でも、真田先輩のこと、好きで結婚したわけでしょ？」

「そうだよ。でも、ただ好きだけだったら、結婚しなかったと思うもん。まだ若いんだしさ」

「そうなの？」

疑問だらけの咲子の問い掛けに、万里江はゆっくりと頷いた。

それでも、お見合いなどでもない限り、結婚は恋愛を経て辿り着くものだと思っていた咲子には、俄かには理解できない話だ。

「理解不能？」

「そうね。まあ、結婚する気ないから、私には関係ないとも思うわ」
苦笑混じりに、素直に答えると、万里江は「サキらしいね」と一
緒になつて笑つた。

それから、しばらく互いの近況などを語り合つた後、夕食をとる
為に店を移動することにした。万里江が、お気に入りのお店がある
のと案内してくれたのは、日本的な外観の小料理屋だった。

「いいお値段しそうね」

「そう思うでしょ？ でも、そうでもないんだよ。コースの金額も
幅広いし」

大体、うちの旦那の稼ぎじゃ、そんなに高級なお店には行けない
わよ、と冗談めかして笑う万里江に、失礼ながら咲子も納得してし
まつた。

笑みを交わし合いながら、入口を開け暖簾をくぐると、木目の温
かさを感じる、落ち着いた雰囲気の内装が目に入ってきた。

カウンター席が五席と、四人ほど座れる座敷が三つで、人数が多
ければ、テーブルを繋いで対応できそうな様子だ。

全体的にこぢんまりとまとまっている店内は、まだ開店時間から
間もないためか、他の客の姿はない。

いらつしゃい、とカウンターのの中から大将らしい男性が低く渋い
声音で発すると、追いかけるように若い男の声で同じ言葉が続く。

「二人なんですけど、お座敷でも大丈夫ですか？」

万里江がそう訊く間に、奥の座敷を整えていたらしい若い店員が
小走りに近寄つてきた。

「大丈夫ですよ」

「咲子さん？」

大将が答えるのとはほぼ同時に、咲子のよく知った声が被さつた。

「え？ 渡辺の働いてるお店って、ここだったの？」

「サキ、知り合い？」

「何だ、ハル坊の友達か？」

咲子は晴希を、万里江は咲子を、大将は晴希を、それぞれ驚いた表情で見つめていた。

「大学の友達なんです。真田さんの奥さん、咲子さんのお友達だったんですね」

「そうなんだ。でもバイト君がサキの友達だなんて、すごい偶然だね」

「俺もびっくりしました。あ、すみません。お座敷ですね」

世間話になりそうなところで、晴希が我に返って二人を座敷へと案内する。

予想外のところで会ってしまい、何だか奇妙な気持ちを抱えながら、咲子は座敷に上がり、腰を下ろした。

晴希は慣れた手つきでお茶やおしぼり、お品書きなどを用意し、「お決まりになったらお呼び下さい」と言い残してその場を離れていく。

「てことは、ここが目標のお店ってことか」

「え？ 何？」

「ううん、何でもない。注文は万里江に任すわ。結構来てるんですよ？」

晴希が万里江の苗字を知っていたことから、この店にはそれなりの回数訪れているとわかる。ならば、何が美味しいのかもある程度知っているだろうと思い、咲子は万里江に任すことにした。

お品書きに目を落とす万里江を余所に、咲子は改めて店の中を見回す。

白木に貼られた、『本日のおすすめ料理』の達筆な文字。品良く飾られた、書と季節の花。座敷席の灯りは控え目で、補うような形で間接照明が置かれている。

よくある居酒屋の雑然とした雰囲気とは似ても似つかない。

けれど、もしここを手本とした居酒屋を作るのなら、咲子にとっては非常に好ましい空間が出来あがるのではないかと思えた。

「この『椿』のコースでいい？ 値段も量も丁度良さそうだし」

「いいわよ」

「じゃあ、呼ぶね。すいませーん」

呼び声に、晴希が元気の良い返事を返し、早足でやってくる。

万里江が注文を告げると、伝票にすばやく書き留め、しっかりと確認してから戻っていった。

万里江は晴希が厨房の方へと入ることを見届けると、少し声を潜めて咲子を見遣る。

「それにしても、珍しいね。サキに男友達って」

「うん、私もそう思うわ」

大学では、サークル活動などもしていない咲子は、男友達を作る機会などほとんどなかった。当然顔見知りの男子はいるけれど、話しかけられれば答える程度で、それ以上親しくなる必要性も感じていない。試験や講義に関する情報を交換できる女友達が数人いれば、何の不自由もなかった。

高校時代にも咲子にほとんど男友達がいなかったと知っている万里江には、不思議に思えたのだろう。

「仲、良さそうじゃない」

「食べ物好みは合うのよね。よく食べ歩きに付き合わされたりするし」

「……ねえ、付き合ってるってわけじゃないよね？」

更に声を低くし、窺う様子の万里江に、咲子は反射的に顔を顰めてしまった。

「マリまでそういうこと言う？」

「ってことは、他にも言われたんだ」

「タエよ。来る前にウンザリすることがあったって言ったでしょ」

おしぼりの端を苛々といじりながら、咲子は盛大な溜め息をつく。それになるほど思ったのか、マリはすぐさま謝罪し、言葉を続けた。

「タエちゃんにしつこく訊かれたんだ。でも、普段のサキを知っていると、それも無理ないかもね」

「友達だつて言つてんのに、しつこ過ぎるのよ、タエは。あの何でもかんでも恋愛に結び付ける思考回路はどうにかしてほしいもんだわ」

憤慨する咲子を、興味津々の眼差しで万里江が見つめる。

万里江も僅かながら、咲子と晴希の関係を疑っているようだった。「言つとくけど、本当に何も無いわよ。渡辺も、今は恋愛嫌悪気味だし」

「そうなの？ 結構モテそうなのに」

「だからなんじゃない？ 話聞く限りでは、かなり辟易してるみたい」

「あー、モテるが故の苦惱かー」

羨ましい限りねと茶化すような万里江に、そんなもんかしらと咲子は常と変わらず淡々とした口調。

「でも、そう考えたらちよつと似てるよね、サキと渡辺君」

「どこが？」

「モテるのに、恋愛したがないところ」

自信満々に言う万里江に、咲子はまたも眉間に皺を寄せた。

今までの人生で、モテた記憶などない。それに、もし万里江の言うとおりだったとしても、咲子にとっては迷惑以外の何ものでもなかった。

咲子の表情から、何を考えているのか悟ったのか、万里江は苦笑を零す。

しかし、ふと真面目な顔に戻り、

「でもさ、もし渡辺君に彼女できたらどうするの？」

そんな質問を投げかけてきた。

言われてみれば、それはさほど可能性が低くないことに気付く。

咲子とは違い、もともと晴希には過去に付き合った女性何人がいる。

今は恋愛する気がなくても、そのうち今までとは違って、晴希が心を許せるような相手が出てくることも有り得るのだ。

そんな状況を少し想像してから、咲子は徐に口を開いた。

「どうもしない、かな」

「どうもしない？」

咲子の答えに、万里江は意外さを隠せないようだった。

補足するように、咲子は続ける。

「別に、恋愛は渡辺の自由だし、彼女出来たらそれはそれでおめでとつって話じゃない。ただ、やっぱり彼女に申し訳なくなるから、今みたいに一緒にご飯食べに行ったりするのは出来なくなるでしょ。それは少し惜しいかな」

「惜しい？ 寂しい、じゃなくて？」

「うん。惜しいっていう方が適切な気がする。渡辺って、色々となよね。気を遣わなくていいし、妙に女扱いしないし。何か『男』って感じないのよ」

恋愛対象として相手を見る時、やはりそれが態度や行動に現れると咲子は思っている。

自分をよく見せようとしたり、共通点を見つけ出そうとしたり、言い方は悪いが、媚を売るような発言や行為が見えるだろう。

しかし、晴希は咲子を対等に扱う。自分を下げるわけでも、咲子を持ち上げるわけでもなく、同じ視線で話し、行動するのだ。

それが咲子にはとても心地良かった。

「ふーん、本当に友達なんだー」

「だから、そう言ってるじゃない」

「じゃあさ、もう一個質問。怒らないで答えてね」

そう前置きすると、万里江は少し顔を近づけ、咲子にだけ聞こえる声で囁いた。

「渡辺君に付き合ってくれて言われたら、どうするの？」と。

「失礼します」

タイミングがいいのか悪いのか、晴希がお盆に数品の料理を乗せて運んできた。

すぐさま万里江は身体を引き、愛想笑いのようなものを浮かべる。素朴な味わいのある器にセンス良く盛られた料理を、丁寧な手つきで並べると、晴希は簡単に料理の説明をした。

「あれ？ このカブのみぞれあんって、コースに入ってた気が……」

お品書きになかった一品に気付き、万里江が晴希に確認をとる。すると、晴希は砕けた表情で笑った。

「それは、俺からのサービス。美味しいと思うから、食べてみて」言葉の後半は、咲子に向けられていた。

多分、「咲子の好みの味だから、食べてみて」なのだ判断する。

「よし、食べよう！ あー、どれも美味しそう！ いただきます！」嬉しそうに声を上げる万里江に、咲子も同じ思いを抱きながら、箸を手を取った。

手を合わせて小さくいただきますと呟くと、早速晴希の好意であるカブから箸をつける。

一切れ口に入れると、しっかりと出汁が染み込み、優しい甘さを持ったカブの旨みが拡がった。

「ホントだ。美味しい」

食事に行く機会が多いただけあって、咲子の好みをしっかりと理解しているらしい。

思わず笑みが零れそうな美味しさに、咲子の箸は進んだ。

「で、さっきの答えは？」

横目でチラチラと晴希の動きを確かめながら、万里江が答えを促す。

食事の満足さに、一瞬何の話だったかと忘れかけていた咲子は、ああと小さく声を上げると、眉尻を下げた。

「それは困るわ」

「え？ 困るの？」

「だって、そういうのがないから、渡辺とは一緒にいられるんだし。そんなことを言われたら、一瞬で渡辺を嫌いになりそう」

それは、咲子の本心からの言葉だった。

恋愛感情が差し挟まれた瞬間、晴希と過ごす居心地の良い時間はなくなってしまう。

そう思うと、晴希に彼女ができてしまう以上に、避けたい状況に思えた。

「でも、気は合っんでしょ？」

「だから、友達だからこそ、なんじゃない？ 恋愛になったら、男の態度って変わるもんだと思うし」

本当に、恋愛など煩わしい。改めて咲子はそう感じる。

どうして、男女が一緒にいるだけで、真っ先に恋愛関係を疑われるのか。

今後も晴希との関係を、こんな風に勘繰られるのかと考えるだけで憂鬱になり、ますます恋愛に対してプラスの感情を持たなくなるのだった。

第三章 はな ならなくに

大学構内にあるカフェの一席で、咲子はレポート用の資料を広げながら晴希を待っていた。次の講義が晴希と一緒にあり、その講義で課題として出されているレポートに関して、意見を交換しようという話になったのだ。

咲子は丁度前の講義が休講だった為に、先に待ち合わせ場所であるこのカフェに来ていた。晴希はまだ講義中なので、しばらくは現れないだろう。

ぼんやりと待っているもの手持無沙汰ということで、専門用語満載の分厚い書籍と授業で配布されたレジюме、丁寧に板書を写したノートなどを広げていた。

その勉強道具で溢れ返ったテーブルの上に、突然二つのカップが置かれる。

怪訝な表情で顔を上げると、知らない男子学生が立っていて、にっこりと微笑まれた。

「ここ、いいかな」

「席なら他に幾らでも空いてますけど」

今は講義時間の為、カフェ内には充分過ぎるほどの空席がある。それなのに、わざわざ咲子に相席を求めてくる時点で、ろくな男ではないと判断した。

咲子の言葉が聞こえていないかのように、その男は正面の席に座り込む。テーブルに置いたカップの片方を差し出し、「これ、あげる」とまたも微笑んだ。

「結構です。知らない人におごってもらわう謂れはないですから。それより、私はまだその席が空いているとは言ってませんけど？」

「晴希、待つてるんでしょ？ 岡本咲子さん」

待っている相手を言い当てられ、加えてフルネームまで呼ばれてしまい、咲子は驚くよりもますます警戒して相手を睨みつけた。

晴希のことを知っているとということ、何がしかの繋がりがあるということとは間違いないだろう。しかし、だからといって彼が咲子に話しかけてくる理由にはならない。

「そうですね、それが貴方に何か関係ありますか？」

「晴希と付き合ってたんの？」

咲子の質問には全く答えず、そればかりか不躰な質問を寄越す男に、思わず咲子は怒鳴り返したくなった。が、公共の場であることをわきまえ、ぐっと怒りを我慢する。

「貴方、渡辺の知り合いなんでしょ？ だったら渡辺に訊けばいいじゃない」

「アイツは、『彼女じゃない、友達だ』って言ってたよ」

「だったら、今更私に確認しなくてもいいんじゃないの？ そういう質問が相手に不快感を与えるって、どうしてわからないのかしら」

苛立ちの為、途中から丁寧な言葉遣いもなくなり、あからさまに棘のある台詞が口をついて出た。

それでもその男は堪えていないのか、むしろニヤついた表情を増加させた。

「じゃあさ、俺と付き合わない？」

「ばっ……」

口から飛び出しそうになった、「馬鹿じゃないの？」という言葉が無理やり飲み込むと、自らの冷静さを取り戻す為、一旦深く呼吸する。

それから咲子は相手をじっくりと観察した。

顔立ちは整っている部類に入るだろう。もう少し爽やかに笑えば、女の子は騒ぐタイプなのかもしれない。

ただし、自分が女性から好意を持たれやすいのだと自信があるらしく、その自信過剰さが見え隠れして品の欠片もなかった。

今も、咲子に断られることなど、微塵も予想していないように思える。

同時に、咲子に対して純粹な好意があるわけではなく、興味本位、

もしくは外見などから判断して声をかけてきたにすぎないのだろうとわかった。

「どうして？」

「え？」

咲子の淡々とした返事は、男の期待を大きく裏切ったのだろう。それどころか、何を言われているのかもいまいち理解していないようだった。

「『どうして』って、何が？」

「だから、どうして私が『はい』って返事をすると思うの？」

「い、いや、別にそんなことは思っていないけど……」

「そう？ 私にはそんな風には思えなかったけどね。まあいいわ。

答えはNOよ。はい、終わり」

強引に話を打ち切ると、咲子は再び資料に目を落とし、ポイントとなる部分をノートにメモし始めた。

男はしばし呆然としていたが、すぐに焦りを滲ませてテーブルに手をつき、咲子の顔を覗き込むように話しかけてくる。

「お、終わりって……。別に晴希と付き合っていないんだろ？」

「そうよ。渡辺は友達。でもそれと、貴方と付き合わないことには何の関連性もないじゃない」

「彼氏いないから、晴希とつるんでるんじゃないのかよ？」

「彼氏がいようとまいと、渡辺は友達。それに何か問題でも？」

「友達とか言っつて、本当は晴希のこと好きで一緒にいたいだけだろ」
咲子の冷淡な対応に腹が立ったのか、男は馬鹿にするような視線と口調で言い放つ。

妙子よりも性質が悪いと、呆れとともに溜め息を吐き出すと、まっすぐに男を見つめた。

「そうやって、何でもかんでも恋愛と結び付けないと考えられないわけ？ とんだ色ボケね。渡辺には友達選ぶようにアドバイスしてくわ」

「なっ！」

逆上した男が立ち上がり、拳を振り上げる。けれど、その拳が振り下ろされるより早く、その手を掴んだ者がいた。晴希だ。

「何してんの、おまえ」

低い声音と鋭い視線で男を威圧すると、男は苛立ちをぶつけるように晴希の手を振り払い、その場を後にした。

時計を確認すると、講義終了時間よりわずかに早い。

「もう終わったの？」

「うん。教授がこの後用事あるって早めに終わったんだ。おかげで助かったよ」

「助かったのは、渡辺じゃなくて私でしょ。ありがとう」

素直に礼を言つと、晴希は照れを隠すように笑い、先程まで無礼者が座っていた席へと腰を下ろす。

鞆から咲子と同じように資料やノートを取り出しながら、それにしても、と感心するように話し出した。

「咲子さん、強いなー。殴られそうになつてんのに、全然動じてなかっただろ」

「渡辺が歩いてきてるの見てたしね。渡辺なら、絶対止めてくれるでしょ」

「お！俺信頼されてるー。何か嬉しいなー」

満面の笑みを見せる晴希に、咲子も思わず笑顔になる。

しかし、すぐに晴希の笑顔はしゅんと萎れてしまった。

「どうしたの？」

「いや、咲子さんに悪いことしたなーって思つてさ」

「別に渡辺は何もしてないじゃない。さっきの馬鹿男が勝手に言い寄ってきただけなんだし」

あの男の行動に対し、晴希が謝罪をするのはおかしいだろうと咲子は思うのだが、どうやら晴希はそれでは納得できないようだった。

咲子の言葉に首を振り、更に申し訳なさそうに眉尻を下げる。

「実はさ、アイツがちょっと前から咲子さんのこと気にしてるの知つてたんだよ。結構しつこく訊いてくるから適当にあしらつてたん

「ただ、咲子さんが恋愛する気ないこととかまでは言っていなかったからさ。もし言っていたらこんな風にならなかったかなーって……」

「確かに晴希の言うことも一理あるのだが、それでも咲子は同意することはできなかった。」

「何より、咲子を見た限りでは、晴希の一言があったからといって、それが防止策になったとは思えなかったのだ。」

「でもアイツ、自分に自信があるんでしょ？　そういうタイプは、落とそうと思った相手が恋愛に興味ないとか言っていたら、余計に躍起になって口説くに決まってるんだから」

「かつて似たようなタイプの男から言い寄られたことがあった為にそう言っと、晴希は一瞬考え込むような素振りをする。」

そして、妙に納得した表情で、苦笑した。

「確かにアイツ、そういう性格だわ」

「ほら。だから渡辺が気にしなくなっていたいいわよ」

「あ、でもさ、咲子さんが俺のツレの所為で嫌な思いしたってのに、は変わらないから、お詫びさせて！」

「いいわよ、そんなの」

「てのは口実で、前に言っていたけど、俺の作った料理食べてくれない？」

料理と言われて、出逢った当初にそんな話をしていたことを思い出した。

もう数カ月も前の話ではあったが、そういえばお店に食べに行くことはあっても、手料理を振る舞ってもらったことはまだない。

晴希が自分の腕に自信を持っているのは重々承知していたので、咲子にとっては楽しみみな提案であった。当然、一も二もなく了解したいところではあったが、一つ気がかりなことがある。

「ねえ、それっていつ？　今日だとちよっと都合悪いんだけど」

「あ、ごめん、何か用事入ってた？」

「用事ってわけじゃないけど、今日は私が晩ご飯作る番なのよ」

「そっか。交代で作ってるんだっけ」

すぐに納得した様子の晴希だったが、しばらく考えると、じゃあさと新たな提案をした。

違う日の誘いだと思っていた咲子だったが、その提案は予想を大きく外れていた。

「咲子さん家で、俺が作るとか駄目？ もちろん、妙子さんの分も」「え？ いいけど、別に今日でなくたっていいのよ？ 他に空いてる日ないの？」

「なくはないけど、実は昨日の内に仕込みしちゃった材料があるんだよね。また次について言ったら、いつになるかわからないし、それに妙子さんって学校行ってるんだろ？」

なるほど、と晴希の考えをすぐに理解できた。

仕込み云々もあるけれど、晴希にとってはちゃんと学校で学んでいる妙子にも食べてもらえるというのは、魅力的なことなのだ。

確かに、咲子は美味しいか美味しくないかの判断はできる。しかしそれは、あくまでも個人的好みの範囲でしかない。

だが、妙子ならば、その料理の長所だけでなく短所にも気付けるだろうし、それを指摘した上で改善案を示してくれる可能性もあるのだ。

ただ一つ、気がかりなことは、妙子の性格だった。

「夕工、渡辺が来たら多分うるさいけど、それでも大丈夫？」

「覚悟しとくよ。それに、俺もサークルの面子から結構うるさくつつこまれてるしね」

お互い苦労するよねと晴希が苦笑いすると、咲子も溜め息まじりの笑いを零すしかなかった。

その日の講義が終わると、まずは晴希の住むアパートに二人で向かった。仕込みが終わっているという材料を取りに行くためだ。

足りない食材は、途中でスーパーに寄って買い足し、それから咲子の自宅へと向かう。

家に辿り着くと、まだ帰宅していないと思っていた妙子が、奥から顔を出した。

「もう帰ってたの？ 火曜は遅いんじゃない？」

「今日は実習が早く終わった……って、サキが男連れてるう！」

目敏く晴希の姿に気付いた妙子が、途端に声を上げる。咲子は顔を顰め、空いている左手で煩げに耳を塞いだ。

「夕工、声落としてよ。近所迷惑」

「初めまして。咲子さんの大学の友人で、渡辺です」

「あつ、君が噂の渡辺君なのねえ！ かつこいいじゃない！」

「だから、声落とせて言ってるでしょ。それから、今日の晩ご飯は渡辺が作ってくれることになったから」

咲子に鋭く睨まれて身を竦ませた妙子だったが、後半の言葉に啞然としてしまった。

晴希は客であり、もてなされる側の人間だ。本来ならば、逆なのではと当然ながら思ったのだろう。

そんな妙子を余所に、咲子はさっさと靴を脱ぎ、晴希にも上がるように促した。

「渡辺、こつちが台所」

案内する咲子の声に、ようやく我に返った妙子は「どうぞ」と晴希を奥へと招き入れた。

礼儀正しく会釈し、咲子の後を追う晴希の背中を、妙子は物珍しそうな視線で眺める。

奥まで晴希を通すと、咲子は台所の中身を説明し始めた。

ここに調理器具、ここに調味料と、細かく場所を教える咲子に、一つ一つ確かめながら晴希は頷いている。

一人取り残された妙子が、二人の姿をダイニングの椅子に腰かけ眺めていると、説明を終えた咲子も同じく、妙子の隣に腰を落着けた。

「ねえ、サキ。何で渡辺君がご飯作るとかって話になったの？」

「普通はサキが手料理を振る舞うもんじゃなあい？」

「渡辺、お店持ちたいんだって。だから自分の作った料理を試食して欲しいのよ。アンタ、専門で勉強してるんだから、少しは役に立てるでしょ？」

「まあ、多少ならねえ」

どこか奥歯に物の挟まったような言い方をする妙子に、咲子は僅かに表情を曇らせる。

「何よ。まだ渡辺との関係を疑ってるわけ？」

「ううん、それはもうわかったわ。何か、普通に友達過ぎて、否定のしようもないんだもん」

テーブルに頬杖をついた姿勢で、妙子は包丁を握る晴希の後ろ姿をつまらなさそうに見つめている。

それでも、何か引つ掛かるものがあるのか、その口調は納得しきれていない様子だった。

「だから、友達だって何回も言ったじゃない」

「でも、サキの友達にしては、やっぱり異質な気がするのよねえ」

「それは渡辺が男だからでしょ？ マリとかと同じに考えたら、そんなにおかしくないと思うわよ」

「うーん、そうなのかなあ？」

半信半疑といった感じではあったが、それでも妙子は晴希が友達であるという部分は認めてくれたようだった。これでもう煩く言われなくなると思うと、咲子は内心ほっとする。

「でも、ようやくサキにも彼氏ができるんだと思ったのにい。そこだけはやっぱり残念」

がっかりとした口調でばやく妙子の言葉に、咲子は安堵したのも束の間、まだ言うのかと溜め息が零れた。

「いつも思うんだけど、何でそんなに私に彼氏を作らせたがるの？ アンタには何の得もないでしょうが」

「だってえ、このままいつたらサキは絶対いき遅れちゃうでしょう？ そうなったら、大変じゃなあ。それに、自分の子供に従兄弟がないとか可哀想だし」

「……一体、どれだけ先の話してんのよ」

実際は、咲子達の年齢から考えれば、言うほど未来の話でもないだろう。けれど、咲子にとってはまだまだ先というよりも、一生縁のないような話だった。

余計なお世話とでも言いたくなるような妙子の心配を一笑すると、「お生憎様。私はこの先も彼氏なんて要らないし、結婚もする気ないわよ」

きっぱりとそう宣言する。

その様子に、妙子はぶうと頬を膨らませたが、すぐにつられるように笑い出した。

そのまま二人はしばらく笑い続け、その後は他愛ない会話を楽しみながら、晴希の料理が出来あがるのを待った。

数十分が過ぎ、台所からは食欲をそそる香りが流れ出ていた。

咲子が声を掛けると、笑みを湛えた晴希が顔を出す。手には出来たての料理があった。

「お待たせしました。もうできたから、あとちょっとだけ待ってて手にした料理をテーブルに慣れた手つきで並べると、それだけ言い残してまた台所へと消えていく。

妙子にお茶の準備を頼むと、咲子は立ち上がり、晴希の手伝いに向かった。

「これも運べばいいの？」

「うん、サンキュー」

「作ってもらったんだから、これくらいはしらないとね」

「こっちは強引に押しかけて、アドバイスもらおうって腹なんだけどね」

だからお礼を言うべきなのは、やっぱり自分の方なのだど、晴希は咲子に微笑んだ。

残りの料理を全て並べ終わり、食事の準備が整うと、咲子と妙子は先程までの席に腰を下ろした。

晴希も勧められるままに、空いていた二人の正面の席へと座る。
「意外い。もつとアバウトな感じで出てくるかと思ってたあ」

妙子の感心した声の通り、晴希の作った料理は綺麗に盛りつけられていた。

小料理屋で働いているのも伊達ではなく、洒落つ気のない器にも品良く盛られた料理たちは、見るからに美味しそうだ。

「料理は見た目も大事だしね。では、公正な判断をお願いいたします」

冗談っぽく言いながらも、晴希は少し緊張したような面持ちで頭を下げた。

メニューは居酒屋でも定番の揚げ物やサラダもあったが、夕食ということで、汁物や煮物も添えられている。野菜の量も充分にあっただので、栄養バランスも考えて作られたのだろうと思われた。

二人揃って手を合わせると、思い思いの料理を口へと運ぶ。

「美味しい！ 何コレ？ 何の唐揚げ？」

「卯の花。ヘルシー志向の人にどうかناと思って」

「うん、いいと思う。ソースもさっぱりしてるし、でも食べごたえもあるし」

感想を述べながらも、咲子は次の料理に箸をつけ、またその美味しさに感動しながら感想を伝える。予想以上の料理の出来に、咲子の食はどんどん進んでいた。

しかし、一方で妙子は黙々と箸と口を動かすだけ。常は食事中もやかましいくらいに話すのに、不気味なほど大人しい。そして、普段を知らなくても、晴希は咲子からよく妙子の話は聞いている。その態度を気にしないはずはなかった。

「妙子さん、美味しくない？」

「え？ あ、ううん！ そんなことない！ すっごく美味しいよ。びっくりした！」

晴希に問われ、妙子は慌てて取り繕うように料理を褒め始める。

「お店で働いてるだけで、学校とかには行ってないんだよね？ な

のに、基礎もしつかりしてるし、ありがちなメニューに見えて、ちゃんと工夫してるのがわかるわ」

「マジで？ お世辞じゃなくて？」

「うん。ちゃんとお店で出てきてもおかしくないと思う」

妙子からの太鼓判を貰い、晴希は緊張が解けて満面の笑みへと変わった。

そこにたたみかけるように咲子も続ける。

「ホント、美味しいわよ。渡辺がお店出したら、行きつけになっちゃうわね」

「まあ、それはまだまだ先の話だけどね。資金も貯めないと駄目だし。あ、でも、これからも俺の作った料理食べてくれる？ まだ他にも試行錯誤中のメニューとかあつてさ」

「こんなに美味しいならいつでも大歓迎よ。けど、これからはタエが当番の日にした方がいいかもね。その方がタエも楽でしょ？」

そう咲子が振り向いた瞬間、妙子はガタンと椅子を鳴らして突然立ち上がった。

その顔は、うって変わった無表情。

「タエ？」

「……ごちそうさま」

小さく呟くと、妙子はダイニングから出ていこうとする。

慌てて咲子は妙子の手を捕まえた。

「ごちそうさまって、まだ残ってるじゃない。せつかく渡辺が作ってくれたのに、失礼でしょ」

「そんなに渡辺君の料理がいいなら、サキが全部食べればいいじゃない」

「は？ 何言ってるのよ、アンタ」

「私より渡辺君が作る方がいいんですよ！ サキの馬鹿っ！」

叩きつけるように言い捨てると、妙子は廊下へと飛び出し、数秒後には勢いよく閉まるドアの音が響き渡った。

残された咲子と晴希は、呆然とそれを見送るしかできなかった。

「……意味わかんない」

ほんの数分前まで笑っていたところなのに、咲子にはそのあまりの豹変ぶりが理解できなかった。

それに、咲子が妙子に堪りかねて怒りを向けることはあっても、妙子が咲子に怒鳴るなど滅多にない。

一体何が妙子の気に障ったというのだろうか。それほど、晴希の料理を褒めたことが気に入らなかったのだろうか。けれど、妙子自身も晴希の料理を褒めていたのに、と腑に落ちないことばかりが頭に溢れ返った。

「もしかしてさ」

考えに沈んでいた咲子は、晴希の控え目な声にゆっくりと振り返る。

晴希は、ひどく申し訳なさそうな微笑を浮かべていた。

「妙子さん、咲子さんを俺に取られちゃうとか思ったんじゃない？」

「取られるって……、そんな子供じゃあるまいし」

「でも、どう考えても嫉妬だろ、あれは。咲子さんが『妙子さんの当番の日にしよう』って言ったのも、妙子さんからしたら、咲子さんが俺の料理を優先したって風に思えたんじゃないかな」

「でも、やたら私に彼氏を作らせたがってたのよ？　なのに、今更友達とご飯食べることで怒るって……」

「だから、それも咲子さんから『彼氏は要らない』って言葉を聞いて、安心したかったのかなど。絶対そう言われるってわかっててね」

確かに晴希の言うように考えてみると、すんなりと理解できる。

料理の感想を言っていた時には、どこかぼんやりとはしていたが、怒っている様子はなかった妙子。それが、晴希の料理をこれからも食べる約束になった途端に機嫌が悪くなった。

となると、原因はやはりその会話自体に他ならないだろう。

「そんなつもり全然ないのに」

「妙子さんも冷静になればわかったと思うんだけどね。いきなり過ぎてカッとしちゃったのかな」

「……ちよつと行ってくる」

咲子はそう言うと、ダイニングを出て妙子の部屋へと向かった。軽くノックをしてみるが、返事はない。けれど、中にいることは確かだと思い、廊下から話し掛けた。

「夕エ、聞こえてるんでしょ？ あのね、別に夕エのご飯が食べたくないとかそういう意味で言ったんじゃないのよ？ 私が当番の日にしたら、不公平だと思ったから……」

咲子の声にも、妙子の反応は返らない。まるで目の前のドアに話し掛けているような気分だった。せめて反論でも何でもしてくれれば良いのだが、無反応ではこちらもこれ以上どうしていいのかわからない。

「ちよつと、聞いてるんでしょ。返事くらい返したらどうなの？」
もどかしさが苛立ちへと変わり、ついいつものように叱るような口調になってしまふ。

そんな態度では妙子も頑なになるだけだとわかってはいるのだが、それでも抑えることはできなかった。

見かねた晴希が、咲子を宥めながら、代わりにもう一度ノックする。当然、応える声はない。

「妙子さん、提案があるんだけどさ」

晴希は返事がないのも気にせず、話し始めた。

どんな提案を出すのかと、咲子は黙って晴希の横顔を見守る。

「咲子さんと妙子さんの当番制に、俺も混ぜてくれない？」

「渡辺？」

「って言っても、俺はバイトの都合とかあるから、週に一、二回とかでいいんだけど。俺がまた作りに来させてもらってもいいし、二人と一緒に俺の家に来てくれてもいいしさ。あ、出来れば俺も妙子さんの料理を食べてみたいんだけど、駄目かな？」

間接的に、咲子と妙子の仲を裂くようなつもりはないと、晴希は言いたかったのだろう。

何とか懐柔しようという言い方ではなく、純粹に妙子の料理に対

する興味があることも伝わってきた。

それでも、やはり妙子からの返事はなかった。部屋の中から微かに動く気配は感じるものの、それ以外は何も聞こえてこない。

晴希は諦めて咲子の肩に軽く手を置き、戻ることを促す。

再度妙子の部屋のドアに目を遣る咲子だったが、変化のないことに溜め息をつき、晴希に従った。

「ごめん、渡辺」

「いいよ。でも妙子さん、相当咲子さんを好きなんだな。もしかして、口では文句言いながら、結構甘やかしてる？」

そんなことはない、と言いかけたが、万里江に言われたことを思い出して、咲子は反論を諦めた。

かわりに、苦々しく唇を噛み締める。

「……私はそんなつもりなかったけど、友達には夕エに甘いつて言われたわ」

「やっぱりそうか。咲子さん、優しいもんな」

「優しくないわよ、別に」

「優しいよ。自分に害意のない相手にはね。でなきゃ、初めて逢った時も俺の話なんて聞いてくれなかっただろ？」

自信満々に言い切る晴希に、咲子は「あの時はたまたまよ」と言い訳をするが、晴希はいい加減な相槌で話を終わらせると、食事に戻ろうと先に席に着いた。

このまま立ち尽くしていても何の解決にもならないので、咲子も席に戻り箸を取る。

けれど、会話が弾むわけもなく、少し冷めてしまった料理がさらに気まずさを募らせた。二人一緒の食事で、ここまで暗い雰囲気なのは初めてだと思いつながら、それでも料理の感想を伝え、晴希もそれに答えて、何とか会話は成立していた。

食べ終わると、咲子は後片付けを請け負って、晴希をそのまま帰らせることにした。

晴希の方も、申し訳ない気持ちはありながらも、いつまでも自分

がいては、妙子が居づらいだろうと思ったようで、素直に従って帰っていった。

食べかけの料理にラップを掛け、二人分の食器を流しに運ぶ。調理に使った器具などは、すでに晴希が綺麗に洗ってくれていたもので、それほど多くの洗い物はなかった。

泡のたっぷりついたスポンジで汚れを落としながら、今のこの憂鬱な気持ちも一緒に流れ去ってくればいいのと思ってしまふ。

ふと、流れる水の音に混じって、背後からカタンと小さな音が聞こえた気がした。

手を止めて振り返ると、目と鼻を赤くした妙子が台所の入口に立っていた。

「……渡辺君、もう帰っちゃった？」

「ついさっきね」

冷静になり、反省もしたのだろう。妙子の瞳は不安そうに揺れていた。

「私のこと、怒ってた？」

「そんなに心の狭いやツじゃないわよ」

素っ気ない口調ではあるが安心させるつもりでそう言つと、もう妙子を取り乱しはしないだろうと判断してそのまま洗い物に手を戻した。

次の瞬間、背後からきゅっと抱きつかれる。

「タエ？」

「ねえ、サキ。私と渡辺君の料理、どっちが好き？」

「どっちがっていうのはないわよ。渡辺の料理も美味しいし、タエの料理も美味しい。個性が違うんだから、比べようがないでしょ。」

それに、アンタだって渡辺の料理褒めてたじゃない」

「うん。美味しかった。だから……ちょっと悔しい」

自分の料理に対するプライドもあったのだろう。言葉の終わりは、こみ上げてくるものを抑えるような声音になっていた。

洗い終えた咲子はタオルで手を拭くと、真後ろにある妙子の頭を

軽く叩く。

「だったら、今度は渡辺に夕エの料理食べさせて、唸らせてやればいいのよ」

「サキ……」

「あとで渡辺に、『さっきの提案、夕エはOKです』ってメールしとくから。それでいいでしょ？」

「……うん」

咲子が笑顔で振り返ると、妙子もようやく泣き腫らした顔を緩ませた。

妙子の表情に明るさが戻ったことにほっとしながら、これでは甘いと言われても仕方がないかと、自分自身に苦笑の洩れる咲子だった。

第四章 はな さとりたり

晴希と咲子の関係は、周囲の声とは裏腹に、変わらず友人としてのものであった。そして二年も経てば、かつては二人の仲を怪しんだ者でも、本当に友達なのだとな得するに至っていた。

二人は大学を卒業後、当然ではあるが、それぞれの道を歩み始めた。

晴希は以前から働いていた店で本格的に修行を始め、咲子は小さな広告代理店へと就職。

学生時代と違い、生活のサイクルは大きくずれ、会う時間は少ない。それでも、二人の距離は変わらなかった。

料理に関しても、大学時代から変わらず、咲子に食べてもらっている。妙子ともあの一件以後は打ち解け、今では時々料理対決なるものをしていたりするほどだった。どうやら妙子の方も、晴希の存在が良い刺激となっているようだ。

卒業してからは、晴希が夕食当番制に参加できる機会は減ったのだが、それでも休みの日ともなると、積極的に参加をしていた。

今日は、ちょうどその晴希の当番に当たっており、咲子が家に来ることになっている。当初は妙子も来る予定だったのだが、仕事が忙しく来られないというメールが届いていた。

狭い台所で料理の仕込みをしていると、インターホンが鳴る。

咲子が来るには少し早いようにも思ったのだが、仕事が早く終わったのだろうと勝手に納得し、玄関のドアを開けた。

だが、そこにいたのは咲子ではなかった。

「……何？」

悪いと思いなながらも、そんな言葉が口をついて出ていた。

目の前に立つのは、かつて自分が付き合っていた真面目で大人しげな。そして、最終的に晴希が恋愛を嫌になってしまった原因の

女性だった。

実は別れてからも何度も電話やメールがあったのだ。けれどその内容は復縁を迫るようなものではなく、むしろ友達関係に戻ろうとしているような雰囲気だった。

もともと彼女は晴希と同じサークルに属していたし、別れたからと言ってどちらかがサークルを抜けたわけでもなかった。

その為晴希の方も彼女を邪険に扱うができなかったし、そうするつもりもなかった。

元通り、ただのサークルの仲間として接してきたつもりだったのだ。

だから、まさか今更約束や連絡もなしに、自分のマンションにまで押しかけてくるとは思いもしなかった。

「晴希君に、話があつて……」

彼女は消え入りそうな声で、そう告げる。

きっと、こういう姿を見て守ってあげたいと思う男もいるのだろう。だが、晴希には残念ながらそんな感情は湧いてこなかった。

それよりも、こちらの都合もお構いなしに来ないで欲しいという思いの方が強い。もう少し相手を気遣うことのできる性格だったはずなのに、と残念に感じてしまった。

「話つて、電話とかメールじゃ駄目だったわけ？ いきなり来られるとさすがに困るんだけど」

「あ、ごめんなさい」

強い口調ではなかったが、彼女は身を縮めて頭を下げる。少しばかりいたたまれなくなり、優しく聞こえるように努めて、晴希は続けた。

「もうすぐ友達来るから、手短かに済む？ そうじゃないなら、また別の日でいいかな」

「あの」

すぐに帰るかと思ったが、彼女は予想外にもそのまま話を続けるつもりだった。

何を言われるのかと身構えていると、「あの人と付き合ってるの？」と短く問いが寄越される。

『あの人』に該当する相手は、どう考えても咲子しか思い浮かばなかった。

本当に今更だと内心呆れ返ってしまう。大学時代の友人たちも、すでに咲子との関係は友情なのだ和理解してくれているというのに、彼女は未だにそれを信じていないらしい。

それに、そんなことを聞いて何になるのだろう。

晴希は今、自分の将来のために多くの時間を費やしている。もし恋人がいたとしても、相手のために時間を裂いている余裕はなかった。

そのことを、きつと彼女はわかっていないし、懇切丁寧に説明してやる気もなかった。

「咲子さんのことなら、友達だつて随分前にも言ったと思うけど？ それ以外の人なら、思い当る人いないし、大体今は彼女いないから」

「でも、この間も二人で歩いてるのを見掛けたわ」

「友達だつたら一緒にいてもおかしくないだろ。それに、仮に俺が咲子さんと付き合つてても、関係ないよな？」

「そう、だけど……」

知らずきつい口調になっていた晴希に、彼女は徐々に頂垂れ、声も萎んでいく。

同情心がないわけでもなかったが、それ以上に自分の生活に口を出されることの苛立ちの方が上だった。

「悪いけど、もう帰ってきてくれる？ それから、今は誰とも付き合う気ないから」

「……わかった。本当に、ごめんなさい」

そう言つて彼女が踵を返すのと、咲子が階段を上がってきたのが同時だった。

咲子と彼女の視線がばっちりぶつかる。

間が悪いと思った瞬間、彼女は弾かれるように駆け出し、咲子を突き飛ばすような勢いで階段を駆け下りていった。

晴希は慌てて咲子に近寄ると、呆然と手すりに掴まっている咲子を助け起こす。

「咲子さん、大丈夫？」

「う、うん。何？ 修羅場？」

茶化すように咲子が訊ねる。下手に氣遣われるより、冗談まじりのストレートな言葉の方が、晴希の気持ちを何倍も楽にした。「そんなもん」と苦笑を返すと、咲子を部屋へと促す。

「咲子さんと付き合ってるのかわかって訊かれた」

「今更？ いい加減、みんなもわかってるでしょ」

「って俺も思ってたんだけどね」

咲子を部屋に入れると、まずはお茶を用意し、二人揃ってローテーブルを囲んだ。

熱いお茶に気持ちが寛いでくるが、それでも苦々しさが拭い去れない。

彼女に悪意はないのだろうが、想いが真摯であればある程、晴希にとっては重過ぎるのだ。

彼女と自分は合わない。決定的に。

もし今また付き合ったとしても、大切に出来る自信は皆無で、彼女自身も常に晴希の顔色を窺うようになるのではないかと思う。そんな関係に、果たして意味があるのだろうか。

「もう、何で女ってこんな面倒なんだろ」

「モテる男は辛いわね」

「笑い事じゃないって。あの子と別れたの、二年も前だぞ？ もう、とっくにただの友達だと思ってたのに」

盛大に晴希が愚痴を零すのを、咲子はお茶をすすりながら涼しい顔で聞いている。

その表情に、晴希はそこはかとなく安堵を覚えた。

咲子は変わらない。

淡々として、冷静で、中立かつ公正な意見をくれる。押し付けもしないし、頭ごなしの否定もしない。頑張れと無責任な応援もしないし、過度の期待を寄せるわけでもない。

その居心地の良さが、今までの二人の関係を保ってこられた要因であり、とてもかけがえのないもののように思えた。

「咲子さんはそのままでもいいね」

「……言われなくても、あんなに可愛らしくなれないわよ」

慚然と言い返す咲子が、どこか拗ねているようにも感じる。

確かに、晴希から見ても咲子はしっかり者で、何でもそつなくこなして、非の打ちどころがない。仕事の愚痴などもほとんど口に出さないし、弱音も滅多に吐かない。

毅然としていて清々しく、一人の人間として本当に尊敬できる存在だった。

しかし、見る人によってはそれが可愛げないと映ったりもするのだろう。

もしかしたら、咲子は自分でも気付かぬうちに、それをコンプレックスのように感じているのかもしれないと思うと、逆に可愛らしく思えてきた。

ただし、それを口にするときつと咲子は不機嫌になるだろうと思いい、話を本題へと切り替える。

「それより、今日は期待してよ。かなりの自信作だから」

「そうなの？ それは楽しみね」

「この間妙子さんが作ったヤツからヒント貰ったんだけどさ」

「それって、タエが悔しがるわよ。『私のアイデアー！』って」

「うん。そう言わせたくて作ったんだけどね」

咲子と話しているだけで、もやもやと胸の内を漂っていたマイナス感情がほどけていく。

気付けば、彼女との再会などすっかり忘れ、料理の話で盛り上がっていた。

午後十時三十分。

仕事を終え、大将への挨拶も済ませて、晴希は店を後にした。

白い息を吐きながら歩む道すがら携帯を確認すると、二件のメール表示がある。

一件は高校時代の友人から、もう一件は例の彼女だった。内容は先日の謝罪ではあったが、文末には「気が変わるまでいつまでも待ってるから」という一文。

大きく溜め息が零れてしまうのも無理はなかった。

申し訳ないのだが、たとえ今後誰かと恋愛する気になったとしても、彼女がその対象になることはないと言ってきた。

根本的に、合わないのだ。一緒にいて苦痛だと感じた相手と、もう一度やり直したいとは到底思えなかった。

どうすれば、諦めてくれるのか。そんなことを考えながら、帰宅する。

上着をハンガーにかけ、コーヒーでも飲もうとお湯を沸かし始めた。

その瞬間、インターホンが鳴り、更に少々乱暴なノックの音が続く。驚いて固まってしまった晴希だったが、続いて聞こえてくるのは「渡辺え、いるんでしょお！」という明らかに酔っぱらった声だ。慌てて玄関を開けると、アルコール臭の漂う咲子が倒れ込んでいた。

「やっぱりいたあ！」

「さ、咲子さん、声大きいって」

深夜とは言わないまでも、すでに十分遅い時間だ。声を抑えるようにと窺めると、咲子はあからさまに不機嫌そうな顔になる。

それでも近所迷惑になることはわかったのか、口を嚙み、代わりに晴希の背中をバシバシと叩いた。

「痛っ！ ど、どうしたの、咲子さん。何かあったわけ？」

こんな風にひどく酔った咲子は一度も見たことがなかった。酒が

特別強いわけでもないのだが、自分の限界をしっかりと把握して、自分を乱すほど飲んだりはないのが咲子だ。

ましてや、常識ともとれる時間に突然訪問するなど、咲子らしからぬ行動としか思えなかった。

「ちよつと、聞いてよお、渡辺え」

頼りなく寄りかかる咲子の目が、完全に据わっている。支えながら奥に連れていき、座布団の上に座らせると、身体を支えきれないのかベッドに寄りかかり、今度は布団を殴り始めた。

「あんのハゲオヤジい、♀女は大人しくお茶淹れてコピーとつてりやいい」だつてえ。一体いつの時代の話よ、それえ。アンモナイトかシーラカンスかつてえの！ しかも、私が提案した企画をさあ、横取りして、さも『自分が考えましたあ』みたいな顔しやがつてさあ」

呂律の怪しい言葉ながら、咲子がここまで酒を飲んだ原因がはっきりとわかった。

残念ながら、咲子は職場の上司や環境に恵まれていないらしい。今までは愚痴を吐き出さなかった分、ずっと自分の中に溜めこんでいたのだろう。そして、企画の横取りという行為に、咲子の不満が爆発したのだ。

咲子の内面に気付いてやれなかったことが、晴希は悔しかった。けれど、それと同じくらい、今の咲子の姿を見られることが嬉しいとも感じていた。

「ほんつと、あのオヤジ、残りの髪の毛全部毛つてやりたいい！」
「うん、じゃんじゃん毛つっちゃつていいよ。はい咲子さん、お茶」
熱いお茶を淹れて差し出すと、酔つてはいてもちゃんと礼を返してから飲む咲子に、思わず笑みが零れる。

しばらく咲子は管を巻いていたが、やがて睡魔に負けてしまったのか、そのままベッドにもたれて眠ってしまった。

仕方なくジャケットだけは脱がせて、咲子を布団の中へと移動させる。

咲子は気持ちよさそうに、無防備な寝顔を晒していた。

「……普通は、完全な据え膳状態なんだけどなー」
寝息を立てる咲子の顔を見つめながら、まったくそんな気が起こらないことに笑いがこみ上げる。

異性として充分に魅力があると思うのだが、どうしても『女』という括りで咲子を見たくない自分がいるのだ。

甘え合う関係も、尽くし合う関係も、それはそれでいいところはあるのだと思う。けれど、晴希の望む形ではけっしてなかった。

それよりも、今の咲子との距離感が、一番心地いい。男女の関係ではなく、対等で同志とも思えるような、そんな関係をずっと続けていきたい。

この先も、ずっと。

そう考えて、ふとあることに晴希は気付いた。

「何だ、俺って結構偏見の塊だったんだな」

自分自身を鼻で笑うと、晴希は手早く寝間着に着替え、押入れから毛布を一枚取り出した。ローテーブルを脇によけ、電気を消すと、ベッドの横でそれにくるまる。

明日の朝、目覚めた咲子に朝ご飯を作ってやろうと思いつきながら、どこか満ち足りた気持ちを抱き締めて、ゆっくりと目を閉じた。

翌朝晴希が目を覚ました時には、まだ咲子は深い眠りの中にいるようだった。

起こしてしまわないようにと静かに着替えを済ませ、毛布を片付ける。それから冷蔵庫の中身を確認すると、朝食のメニューを素早く考え、その支度にとりかかった。

料理を始めて少し経った頃、ベッドの方から布団の擦れる音が聞こえてきた。

視線を向けると、まだ寝惚けた表情の咲子が、上半身を起こして晴希の方を眺めていた。

「おはよう、咲子さん。もうすぐできるし、顔洗ってきたら？ あ、タオルは適当に使っていいよ」

晴希の声に、咲子は無言で頷く。まだ目が覚めきっていないのだろう。緩慢な動きで洗面所に向かっていた。

それを横目で見送り、晴希は朝食の仕上げに入る。

しばしの水音の後、洗面所から出てきた咲子は、うって変わっていつも通りのしっかりとした表情に戻っていた。

「すつきりした？」

「うん、ごめん。ありがと」

昨日の醜態を覚えているのか、咲子は少し気恥ずかしそうに微笑む。

晴希は出来あがった朝食をローテーブルに運びながら、気にしていないと明るく返した。

「それに、咲子さんのああいう姿、滅多に見れないから、嬉しかったし」

「それ以上言わないで。思い出すと恥ずかし過ぎるから」

「別に恥ずかしいことでもないだろ。大体、咲子さんは自分の中に溜めこみ過ぎ。もっと俺に吐き出していいんだからさ」

咲子を座らせると、晴希もその正面に胡坐をかき、さあ食べようと促す。

言われるまま咲子は手を合わせ、箸を手を取った。

思えば、咲子と今まで何度も食事を共にしてきたが、朝食は初めてだった。

一夜を共に過ごすことなどなかったのが当然なのだが、少しばかり照れ臭い。けれど、悪い気分ではなかった。

「俺はさ、いつでも咲子さんの傍にいるから、もっと頼っていいよ」

咲子は自分一人で何でも解決しようとする。それが晴希には少し寂しかった。

自分は咲子に色々と力になってもらっているのに、咲子は晴希に協力を求めようとはしないのだ。

そういえば、咲子が何を指し、どんな将来を思い描いているのかも聞いたことがない。

愚痴や不満も含め、そういうところでもう少し相談などをしてくれてもいいのにと、真剣に思ってた言葉だった。

しかし、当の咲子は、「何か、プロポーズみたいよ、それ」と笑いながら茶化した。

頼られることが多かった咲子は、頼ることに慣れていないのだろう。そんなところばかり不器用なのだ。

「そう取ってもいいよ」

「え？」

茶化した咲子の言葉を、晴希はさりと肯定した。

咲子は絶句し、茶碗を持ったままの姿勢で止まってしまふ。

そんな咲子に笑みを向け、晴希は常と変らぬ口調で昨夜辿り着いた一つの結論を語り始めた。

「俺さ、色々考えたんだけど、結婚って恋愛感情じゃなくてもアリなんじゃないかなと思って。咲子さんなら一緒にいて楽しいし、気も合うし楽しだし、ずっと一緒にいられる気がする。咲子さん的には無理？」

問われた咲子は、呆然としたまま晴希の表情をまじまじと見つめていた。そこには晴希の言葉に対する嫌悪感などはなく、ただただ驚きの感情ばかり。

確かに唐突ではあると自分でも思ったのだが、不思議と咲子から拒絶されはしない予感があった。

やがて、考えが纏まったのか、咲子は手にしていた茶碗を置くゆっくりと首を横に振る。

「無理、じゃないと思う。渡辺のご飯、美味しいし」

「って、そこ!？」

思わずツッコむ口調になった晴希に、咲子はくすりと小さな笑いを零した。

そして、出逢った頃に似たようなやり取りをしたなと思い出し、

くすぐつたい思いを感じながら、晴希も誘われるように笑い出す。

「あーあ、胃袋掴まれちゃったわ」

咲子の本心と裏腹のぼやきが、晴希の耳に優しく響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2736z/>

はなひらかねど

2011年12月13日09時48分発行